

# らいいプラス

二十一・三十代前半は仕事の遅れが心配で出産に踏み切れない。三十代半ばを迎えて仕事の基盤もできたのでいざ出産をと思ったところ、なかなか授からない。こんな悩みをひそかに抱える女性社員は少なくない。会社勤めをしながらの産みどきを、どう考えたらいいのか。

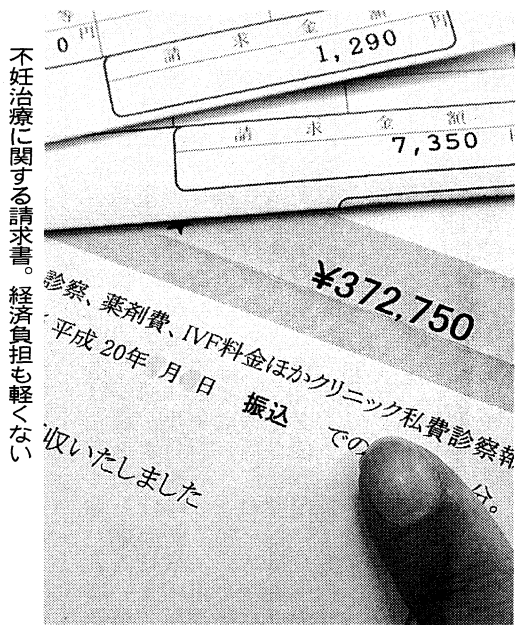
IT(情報技術)企業の女性部長(45)は、多いときは月五回、早朝六時半から不妊治療クリニックの予約の列に並ぶ。「高齢出産がこんなに難しい」とため息をつく。

三十六歳で二回目の結婚。三十八歳のときに自然妊娠が難しいとわかり、治療を続けてきた。時には受精卵を体内に戻した後に帰社して深夜まで残業。治療と取引先との約束が重なり、やむを得ず同僚に代わってもらったこともある。

## 外される不安

三十代前半までは「子どもはまだ早い、管理職になってから」と先送りしてきた。育児休業から復帰した先輩の中には評価を下げられ、第一線から外される人もいたためだ。

特定非営利活動法人(NPO法人)J-Winは二



不妊治療に関する請求書。経済負担も軽くない

## 20~30代前半に 仕事を優先

安心して産めない職場環境も出産先延ばしにつながっている。職場で子育てと仕事を両立している先輩女性が少ない。そんなロールモデルの不在も、若手社員が出産に踏み出せない原因のひとつだ。長時間労働を前提とした評価システムのなかでは出産をためらうという声もあがる。

# 産みたいときは不妊:

不安定な職場環境も影響 J-Winの女性に対する調査では「子育てで」残業・出張ができないと、戦力外通告されてしまう(32歳)、女性社員にとって出産タイミングを男性上司に相談するのは難しい。そこで、みずほ証券では、ダイバーシティ推進が

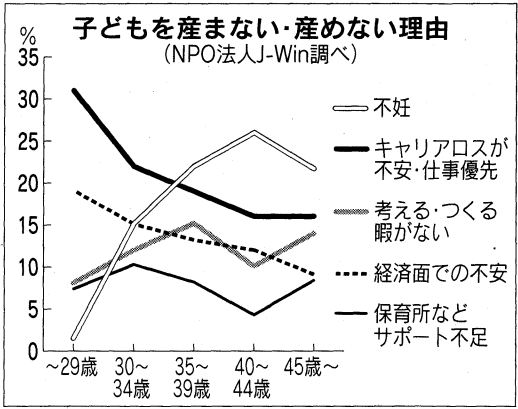
いかもしれない(33歳)といつた不安が自由回答欄に寄せられた。女性社員にとって出産タイミングを男性上司に相談するのは難しい。そこで、みずほ証券では、ダイバーシティ推進が

進室が女性社員と個別面談を行う。大日本印刷では女性社員研修で、出産を遂げる人にも必要」と伝えることもある。キャリア相談室やメンター制度など、女性社員がキャリアアップとライフプランを合わせて相談できる場も有効だ。

〇〇八年十月に「働く女性としての飛び回っていた。子どもを持って両立できそうだなと思えたのは、昇格して間もない三十五歳のころ。ところが「あれこれ...。できない」。不妊治療を二年半続けて三十八歳で出産。「理想は子ども二人。でももう一人は無理」

国も産みたくても産めない不妊問題を注視。高額な体外受精や顕微授精を受けたい人への補助金事業が〇四年に始まり、受給者は〇四年の一万八千人弱から〇七年は約六万人に増加した。

不妊症の原因は男女双方にある。女性の場合は出産先延ばしも一因となりかねない



## 先延ばしリスク 出産可能年齢は不変

ないと、総合研究大学院大学の長谷川眞理子教授は、進化生物学の観点から警鐘を鳴らす。「二百万年前の狩猟採集時代から今に至るまで、女性の卵巣の寿命に変化はない。三十五歳くらいまでに産み終わることを前提とし、その後は卵巣機能が急速に衰える。ところがいつまでも若々しい現代女性は出産可能年齢が上がったと錯覚しがちだ」

### 20代から検診を

東峯婦人クリニック(東京・江東)の松峯寿美院長は「年齢が上がるにつれ、子宮筋腫や子宮内膜症が増える。さらに過労やストレスでホルモンバランスを崩して、婦人科系のトラブルを抱える女性も増えている」と指摘する。「出産が遅れそうなら、二十代のうちから婦人科検診を受け、体のメンテナンスをするといい」と助言する。

金融機関の女性管理職は不妊に悩んだ自らの経験から「三十歳前後を目安にしてはどうか。異動や転勤のタイミングを計ってはいいつまでも産めない」と先輩に助言する。

化粧品会社レナ・ジャボン・インスティテュート社長の蟹瀬合子さん(57)は、広告会社に勤務していたときに二十七歳で出産。復帰後に担当業務からすべて外された経験を持つ。「出産を機に数年ほされたとしても、営利企業では仕方ないこと。その時期にどう過ごすかが問題」だという。

高島屋のギフト・サービスプランニング室長の片岡不二恵さん(49)は、四十歳で第一子を出産。「キャリア面でのマイナスはなかった。ただ責任ある立場で出産すると、自分が抜けたときのバックアップ体制づくりが重要になる」と語る。会社員生活二十年、三十年の先輩たちの助言は、ほぼひとつ。「会社員人生は長い。近視眼的にならないで出産には自然体で臨んでほしい」。同期から数年遅れても、たとえ復帰後に意に沿わない仕事となっても、育児も仕事も必ず糧となるという。

(編集委員 野村浩子)